

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

紙は空気みたいなものだ。身の回りにたくさんあって、いまは紙なしの生活なんて考えられない。でもそうやって身の回りにあふれすぎているので、紙の有難味というのをつい忘れたりする。

同様な喩えで、良い女房は空気みたいなものだ、昔はいったものだが、いまそんなことをいったら大変なことになるので誰もいわない。

それはともかく、¹そういう紙に感謝するため、日本の紙発祥の地を訪ねた。東京の王子だ。

空気発祥の地というのはあるだろうか。ないだろう。同様に、女房発祥の地というのでも^Aトクティはできない。

紙に限ってトクティができるのは、そこに王子製紙があったからだ。というのは紙といってもそれはいわゆる洋紙発祥の地である。和紙となると、株式会社とか資本主義などができずと前から日本では発祥している。

^a いま使われている紙のほとんどは洋紙である。基本的にどう違うのかはそれぞれ事典など引いてほしいが、日常感覚として、新聞、本、雑誌、ノート、コピー、切符、紙袋など、日常使っているほとんどは洋紙だという認識がある。そういう紙を日本では王子で作りはじめて、その王子製紙がいまは十條製紙と本州製紙との三つに分かれているが、とにかくその発祥を記念して王子に紙の博物館がある。

何故王子なのかというと、その発祥した隣には^{注1}大蔵省の印刷局があったのである。お札の印刷所だ。お札を^B白昼堂々印刷するなんてとんでもない犯罪だと思うが、それは^Xの仕事として黙認されている。もちろん民間では^Cゲンキンだ。

でもただの紙なら民間でも作れるわけで、印刷局の隣に製紙工場が発祥した。明治の近代化で通貨が統一され、金貨に替わって紙幣の大量消費時代に突入した、という時代の雰囲気^{ふんいき}が察せられる。

^b その紙の博物館、人があまり来なくてのんびりしている。いろんな紙製品が並び、へえ、これも紙で出来てるの、というような物もあり、紙の歴史、紙の出来る工程などいろいろあったのだけど、いちばんショックを受けたのは紙と材木の比較だった。

ショックといっても大げさなものではない。新聞紙の折り畳んだのが高さ四十センチぐらい、きちんと重ねて置いてある。新聞なんて²古新聞になるとどれも同じものだから、あ、うちの台所にあるやつだと思ってしまう。

で、その横に、直径三十センチ、長さ五十センチぐらいの丸木の材木がぼんと立てて置いてある。それが紙の原料になる木材で、隣に積み重ねた分量の新聞紙を作るのに、そのくらいの木材が使われるという展示だ。新聞紙よりも丸太の方がちよつと大きい。

³ この直接性が凄^{すご}いと思った。とくにそれが新聞紙で、しかも古新聞というのがショックだった。当たり前なことだけど、古新聞なんて何の価値もない。もちろんはじめはパリパリのニュースペーパーだったのだけど、それは半日もしないで古新聞になる。それが日々どんどん山となって、その分材木がどんどん伐採^{はっさい}される。というのが、^{注2}モロ、実感される。

うちはいま三紙取っているの、そこに展示された四十センチぐらいの山は一週間もすれば出来てしま

1

まう。⁴ これはいけないなあと思った、これからはせめて一紙にしないと。

新聞では絶対にこういうことを書かないだろう。新聞というのは一瞬はたしかに新聞だけど、結果としてはほとんど古新聞だ。毎日古新聞を生産して、それを一年中休まずにつづけている。^c 部数拡大につとめている。これからは⁵部数を誇る場合、新聞の題字の横にその部数と同じ分量の材木の山を表示するよう義務づけてはどうだろうか。

新聞だけでなく雑誌もそうだ。何百万部という部数を誇る週刊マンガ雑誌があると聞くが、それが一週間ごとに古新聞古雑誌の仲間入りをしている。材木からどんどんゴミを生産している。薄^Y多売というのほとんど犯罪行為だ。一度みんな紙の博物館へ行ってその小さな展示物を見た方がいいと思う。

つい正しいことを書いてしまった。やはり直接展示の力は凄い。

でもみんな常々感じていることで、それがついつい時代の力に流されている。最近のOA機器の近代化でますます紙の消費量が増えた。この原稿も直接渡せばまだしも、FAXで送ると紙を二倍消費する。念のためにコピーとかいうと三倍、四倍、五倍とどんどん増える。永久保存のためのコピーならまだしも、一瞬のためのコピーで、事が⁶スんだらすぐゴミとなるんでは材木も泣くに泣けない。地球だって泣くに泣けない。

これからはコピーを減らして自分の記憶力を使うように努力しよう。

前に村松友視さんが編集者のころ、ある対談に立ち合ったそう。途中まで進んでテープを入れてないことに気がつき真蒼^{まっそう}になった。それを言うわけにもいかず対談が「無事」に終る。社に帰った村松さんは、自分の記憶力だけを頼りに、とうとうその対談を全部書き起した。それを対談者のもとに届けたが、両者とも気がつかなかったというから凄^{すご}い。

全員にそこまでやれとはいえないだろうが、でもみんな自分の記憶力を使わずに紙を頼り過ぎる。物に頼り過ぎた結果がとうとう地球資源を使い尽したわけで、人類は終末が近づいてきて^E立往生^{りっしょう}している。終末を見たいという誘惑^{ゆうわく}もたしかにある。でも頭を使わずに馬鹿^{ばか}になったまま終末を見たいというのはどうも嫌だ。

記憶力を動員すれば、紙も材木もそんなに使わずにすむ。これからは人間が自分の頭をもっと使って、地球に少し休んでもらう。そうすれば地球環境も復活が可能なわけで、^d人間はあんまり楽をしちゃいけないようだ。これからは材木の代わりに頭を使おう、と思うのだけど、⁷この原稿をFAXの前に持ってきて、いま悩んでいる。

注1 大蔵省：現・財務省。 注2 モロ：影響を全面的に受ける結果となる様子。

(赤瀬川原平『紙がみの消息』より)

問一 二重傍線部A「トクティ」、C「ゲンキン」、D「ス」をそれぞれ漢字にし、B「白昼堂々」、E「立往生」の漢字の読み方をひらがなで記しなさい。

問二 空欄^aに入る最も適切な語を次の中から記号で答えなさい。ただし記号は一回しか使えない。

2

ア さて イ しかし ウ しかも エ やはり オ だから

問三 傍線部1「そういう紙」の説明としてふさわしくないものを次の中から二つ取り出しなさい。

ア 良い女房にたとえられるもの

イ 身の回りにたくさんあるもの

ウ 有難味を忘れそうになるもの

エ なければ生活が成り立たないもの

オ 空気にたとえたら誤解されそうなもの

問四 空欄 X に入る語として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア 職人 イ 企業 ウ 工場 エ 国家 オ 無償

問五 傍線部2「古新聞」と反対の意味内容で使われている言葉を文中より十三字で取り出し、書きなさい。

問六 傍線部3「この直接性」とはどのようなことか。ふさわしいものを次の中から記号で答えなさい。

ア 紙製品と、それを作るのに必要な原料が並べてあることで、必要な原料の量がわかること。

イ 紙製品には、原料が紙だと知らなかったものもあるが、それを明確に示してあること。

ウ 「紙の博物館」が王子にあることで、洋紙発祥の地が王子だということが伝わること。

エ 展示してある新聞が古新聞であることで、洋紙製造の歴史の深さが想像できること。

オ 紙の原料として木材を伐採しつづけている現状を強く非難する意図の展示であること。

問七 傍線部4「これはいけないなあ」とあるが、「これ」の内容を説明した次の文の空欄を、Aには

二字、Bには十二字の語句を用いてうめなさい。

A の消費量が増えれば増えるほど、 B ということ。

問八 傍線部5「部数を誇る……どうだろうか」と筆者が言うのは何をねらいとしたものと考えられるか。最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア 同じ分量の木材の山を表示することで、同じ展示がある紙の博物館の宣伝をするため。

イ 同じ分量の木材の山を表示することで、読者から植林活動への理解を広く得るため。

ウ 同じ分量の木材の山を表示することで、多くの部数を誇る新聞社の勢いを知らせるため。

エ 同じ分量の木材の山を表示することで、発行部数だけ森林伐採されている現実を伝えるため。

オ 同じ分量の木材の山を表示することで、古新聞リサイクルの大切さを訴えるため。

問九 空欄 Y に漢字一字を入れ、「一個あたりのもうけを少なくして値段を安くすること」で多量に売りさばくこと」を意味する四字熟語を完成させなさい。

問十 傍線部6「地球に少し休んでもらう」とあるが、ここに使われている表現技法を次の中から記号で答えなさい。

ア 擬人法 イ 隠喩 ウ 体言止め エ 直喩 オ 倒置法

問十一 傍線部7「この原稿をFAXの前に持つてきて、いま悩んでいる」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア 紙の大切さを主張してきたが、自分の考えに自信が無くなり、原稿の送信を迷っているから。

イ 人間は楽をしてはいけなさと主張してきたが、原稿を届けずにFAXで送ろうとしていたから。

ウ 紙を頼らず、記憶力を使う努力を呼びかけてきたのに、FAX番号を記憶できずにいるから。

エ 資源の大切さを述べてきたが、原稿を新聞に掲載すること自体が資源のむだに思えてきたから。

オ 地球環境を守ることを主張したが、原稿をFAXで送ると紙を消費することに気づいたから。

問十二 次の空欄に、文中よりふさわしい語句を取り出し、この作品のタイトルを完成させなさい。
は地球を救う

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

不登校状態が続く「幸子」の家に、久子曾お婆ちゃんが訪ねて来るようになった。曾お婆ちゃんにとって、幸子の家の庭は思い出深い場所だが、長年の間放置されていた。母・靖子は曾お婆ちゃんを迎えるため「小橋造園」に注ぎ、剪定を依頼する。父・浩史が出張している間、作業は急ピッチで進められ、腕のいい庭師・田坂の手にかかった庭は次第によりみえる。それと同時に、「幸子」も元氣を取りもとどしく。引用文は田坂が剪定最後の仕上げにかかる場面である。

幸子は家中の灯りをとすことにした。カーテンを束ね、窓をすべて開け、どの部屋も電氣を一番明るくした。いくつもあるスタンドも集めて縁側で点けた。生垣の最後は家の西側に回りこむ。ビワを短く刈りそろえたことが幸いして灯りがあたりやすい。それでも足らず幸子は懐中電灯を持って田坂の横で照らした。

田坂は無言で切り続けている。握られては開かれる右手の翼から木鉄の刃先だけが出ている。木鉄はあらゆる角度から枝に食いつき、せわしなく鳴き続ける鳥。懐中電灯が照らす小さな明るさの中に生きている鳥。

幸子はそう思った。そして、ついに剪定は終わった。西側の端の最後の枝の切口を、鳥の嘴が缺んで、音がやんだ。

幸子の目の高さにあわせて、生垣がすべて切り揃えられた。辺りは真つ暗だった。

「見事だ、田坂」
いつの間にか市村が二人の後ろにいて言った。幸子も何か言わなければと思ひ、

「見事です、田坂さん」

と、大声で言ったので、二人の庭師はおもわず吹きだした。幸子もいっしょになって笑った。それから二人の庭師は休む間もなく、青いシートの上の道具類をしまい始めた。幸子は寂しさを感じている自分の心に気がついた。と同時に、²「一つ一つ丁寧にしまわれてゆく鉄に愛着を感じた。」

ペリカンの鉄。両手で持つ大きな鉄。幹を切る鉄。根っこを切る鉄。^{注2}銀二の木鉄。

大小のノコギリやスコップ類。雑草を刈るときに土中の根を切る鎌。大きな切口に塗る薬が入っているビンと刷け。箒。

それらはみんなこの庭の土や木や葉や根に触れたものだ。切って、切って、切り落としていった物たち。しかし、道具は土や木や葉や根の奥深くに触れ、結び、一瞬、鋭く繋がっていった物たちだ。

幸子は一つ一つの道具をしっかりと胸におさめた。

道具によってできたゴミ袋の数も間違えないように数えた。三十七。きのうとあわせて全部で百二だった。

縁側では出張から帰った父の浩史がしばらく **a** 立ち尽くしている。家中の明かりが点いて、庭がライトアップされているときに帰って来ていた。それからまだ着替えもしていない。

「これはいったい…」

³庭と娘の変貌に驚いていた。

うつそうとした庭は跡形もなく、夜気と切ら⁴れた枝葉から発する微香にすべての木々が生きている。そして、幸子がこの半年の間けつて見せなかった元気な姿で職人について回っている。体中から嬉しさが発散している。

「これはいったい何があったというのだ！」

浩史は⁵劇場のようにそこだけ明るくなった縁側に、ただ立ち尽くしかなかった。靖子は本物の庭師が来たと、それだけ言って笑っている。浩史には、何も分からない。庭師が来ると同時に出張に出かけ、自分が帰ると同時に庭師の仕事が終わっていた。

⁶何もかも、たくさんのゴミ袋の中に消えてしまったと、そう思った。

靖子は言った。

「この庭とともに、幸子も生き返ったのよ。これから、春、秋の剪定と消毒など、庭に関するすべての仕事を小橋造園に一括して頼むことに決めたいけれど、いいでしょ。できれば今、庭にいるあの二人の庭師にお願いしたいの」

「そりゃ、かまわないが」

浩史は庭の隅で荷物をまとめている職人の半纏姿を見た。そのそばで幸子が懐中電灯を点けながら何か手伝おうとしている。

「一人でじつと黙り込んでいるようなことは…」

「そんな暗いところはこの二日間全く見せていないわよ。あんなに動き回って、楽しそうに話している幸子は本当に久しぶりよ。あの子には草木のことが分かるのよ。ずっと荒れた庭を見させていた私は、母親としてつくづく失格だと思ったわ」

浩史はそれから、もう少し庭の風に吹かれていた。

縁側にいるのに向こうの生垣を通ってくる風や、白雲木の下を流れる風を感じる。浩史は久しぶりに⁸自分の息遣いが庭の息遣いと混じるのを感じた。ライトアップされていても夕闇の気配は浩史を包もうとしている。

b つていうことはないさ、そう思いながら幸子が自分に気がつくまで、夕暮れの庭を楽しんだ。

(本多明『幸子の庭』より)

^{注1} 剪定：花や実がよくつくようにしたり、木の形を整えたりするために枝の一部を切り取ること。

^{注2} 銀二：田坂の祖父で鍛冶(金属を打ちたたいて刀や農具を作ること)職人。

問一 傍線部1「鳥の嘴」というたとえで表現されているものは何か。文中より五字で取り出し、書きなさい。

問二 傍線部2「一つ一つ：感じた」とあるが、この時の幸子の気持ちや動作となつて表れた一文を取り出し、初めと終わりの五字で答えなさい。(句読点・記号は字数に入れるものとする)

問三 空欄 **a** に入る語として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

ア しよんぽりと イ ぐつたりと ウ 呆然と エ そわそわと オ 悠然と

問四 傍線部3「庭と娘の変貌」とあるが、「庭」「娘」の変化について描かれた部分をそれぞれ過不足なく取り出し、初めと終わりの五字で答えなさい。(句読点・記号は字数に入れるものとする)

問五 傍線部4「れ」と同じ働きのものを次の中から記号で答えなさい。

ア 書道の先生が書かれたお手本にならって字を書いた。

イ この写真を見ると、楽しかった旅が自然に思い出される。

ウ 姉から言われたとおり、目的地は遠かった。

エ 投票用紙はこの投票箱に入れてください。

オ この映画はもう二度と見られない名作だ。

問六 傍線部5「劇場のようにそこだけ明るくなった」とあるが、それはなぜか。説明となっている部分を「くから」に続く形で文中より二十五字以内で取り出し、初めと終わりの五字で答えなさい。(句読点・記号は字数に入れるものとする)

問七 傍線部6「何もかも」とあるが、その内容として考えられるものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 剪定された木々の枝 イ 久子曾お婆ちゃんの思い出 ウ 出張のわずらわしさ
エ 不登校状態の幸子の暗い気持 オ 夫婦間の意見の食い違い

問八 傍線部 7 「一人でじつと黙り込んで」の主語を文中より取り出し、書きなさい。

問九 傍線部 8 「自分の息遣いが庭の息遣いと混じるのを感じた」とあるが、この時の浩史の様子の説明として最も適切なものを次の中から記号で答えなさい。

- ア 自分の呼吸と同じ速さで庭を通る風が吹き付けてくるのを感じている。
- イ 庭が生きていることを違和感なく受け入れ、自分との一体感を得ている。
- ウ 自分の思い通りの庭になったことを実感して、とても満足している。
- エ 自分の中で急に庭への興味がわいてきて、心躍る気持になっている。
- オ 美しく整えられた庭に興奮をおぼえ、自然に脈が早くなっている。

問十 空欄 b に入る語としてふさわしい二字の語を文中より取り出し、書きなさい。

問十一 この文章の特徴をまとめたものとして、正しいものは○、間違ったものは×とせよ。ただし、すべて同じ記号にした場合は採点の対象としない。

- ア 現在形と過去形の両方を使うことで、その場にいるような感じを与える。
- イ 比喩表現を用いることで、情景を具体的にイメージしやすくなっている。
- ウ 体言止めを効果的に用いることで、歯切れのよい文章となっている。
- エ 心情説明を幸子のみに限定することで、子供の視線を強調させている。
- オ 昼から夜の情景を描くことで、過ぎた時間の長さを強調している。

《以下余白》